

平成24年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

「社会的な知性」を培うための幼小中一貫による協働型学習カリキュラムと「知」の循環型教育システムの研究開発

2 研究の概要

幼・小・中12年間で5つの「ステージ」に再構成し、協働型学習カリキュラムを開発し、「知」の循環型教育システムを提言する。

- ① 小・中学校の各教科等の学習において、他とのかかわりの中で学びが深まる「協働型学習」の在り方を提案する。また、幼・小・中合同の「幼小中合同活動」を開発する。
- ② 新教科「社会創造科」を設け、異学年・地域・大学・博物館・高校・NPO・保護者との連携によって、大人＝青年＝生徒＝児童＝幼児による多様な「異年齢協働探究型学習」カリキュラムを開発する。
- ③ 各個人が学習を通して獲得した様々な経験や知識等の「知」が社会的に循環し、それが更なる創造を生み出す「知」の循環型教育システムを開発する。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

知の循環における協働的な学びに着目して、幼・小・中12年間の一貫による以下の取組を行うことで、互いに尊重し合う人間関係をつくり、学んだ知識や培ってきた力を生かしながら、人々の暮らしや環境、社会の諸問題へ目を向け、持続可能な社会を創りあげるために、自ら考え、判断し、実践することのできる主体的な子どもをはぐくむことができるであろう。

<取組の内容と期待する成果>

幼・小・中の12年間で5つのステージに再構成し、以下の内容に取り組む。

- ・ 小学校・中学校の各教科等の学習において、他とのかかわりの中で学びが深まる「協働型学習」の在り方を提案する。また、幼・小・中合同で取り組む「幼小中合同活動」を開発する。これにより、幼児期から思春期までの子ども同士のかかわりが生まれ、その中で学びが深まり、多様な見方を受容し互いを尊重し合う子どもをはぐくむことができる。
- ・ 新教科「社会創造科」を新設し、異学年・地域・大学・博物館・高校・NPO・保護者との連携によって、大人＝青年＝生徒＝児童＝幼児による多様な「異年齢協働探究型学習」カリキュラムを開発する。これにより、主体的に地域に働きかけ、持続可能な社会の構築を目指す子どもをはぐくむことができる。
- ・ 各個人の学習により得られる様々な経験や知識等の「知」が循環し、それが更なる創造を生み出す「知」の循環型教育システムを開発する。これらにより、学校と地域に「互恵関係」が生まれ、学校や地域の教育力が高まり、学校と地域とが一体となって創造や工夫を生み出す地域社会の構築に向かうことができる。

(2) 必要となる教育課程の特例

以下のように各教科等の時数及び総合的な学習の時間を削減し、新教科「社会創造科」を設置する。

- ① 小学校第1学年～中学校第1学年において、国語科の時数を以下のように削減し、その分を「社会創造科」に充てる。

小学校第1・2学年：各25単位時間 小学校第3学年～中学校第1学年：各10単位時間

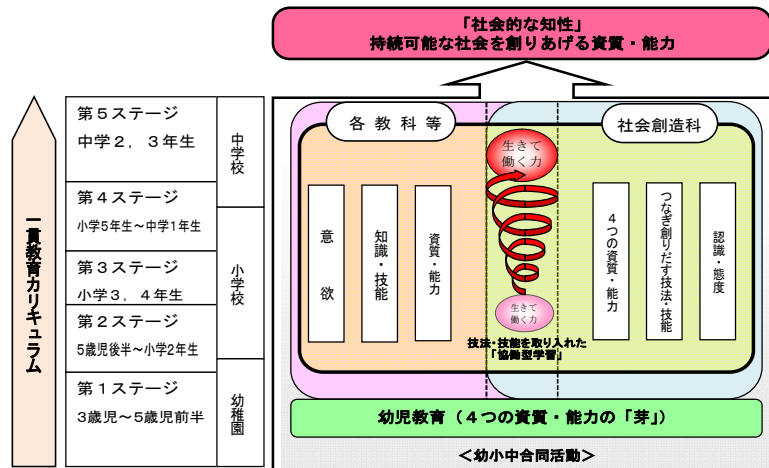
- ② 小学校第3学年～中学校第1学年において、社会科の時数をそれぞれ10単位時間削減し、その分を「社会創造科」に充てる。
- ③ 小学校第3学年～中学校第1学年において、理科の時数をそれぞれ10単位時間削減し、その分を「社会創造科」に充てる。
- ④ 小学校第1・2学年において生活科の時数のすべてを「社会創造科」に充てる。
- ⑤ 小学校第1学年～中学校第1学年において、特別活動の時間をそれぞれ5単位時間削減し、その分を「社会創造科」に充てる。
- ⑥ 上記の各教科等の削減時間と、総合的な学習の時間のすべてを「社会創造科」に充て、4つの資質・能力（自己推進力、人間関係構築力、問題解決力、開発力）、持続可能な社会に関する認識・態度、つなぎ創りだす技法・技能の育成を図る。
 下記は「社会創造科」の配当時間である。
 - ・小学校第1学年：132単位時間 小学校第2学年：135単位時間
 - ・小学校第3～6学年：各105単位時間
 - ・中学校第1・2学年：各85単位時間 中学校第3学年：70単位時間

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

当校園の研究の経緯、幼児・児童・生徒の実態、さらに社会の要請を踏まえて、本研究では「社会的な知性を培う」を研究主題とした。「社会的な知性」を「持続可能な社会を創りあげる資質・能力」と定義し、その資質・能力をはぐくむために、新教科「社会創造科」を設置した。

なお、「社会的な知性」における各教科等と「社会創造科」の関係を次のようにとらえた。



第2年次までの研究の知見から各教科等の資質・能力の一部と「社会創造科」の4つの資質・能力の一部には重なりがあることが見えてきた。

各教科等と「社会創造科」で重なりのあるそれぞれの資質・能力は、「協働型学習」（後述）を通して「生きて働く力」（後述）へと高まり、次の各教科等や「社会創造科」の学習で発揮される。このように、重なりのある資質・能力が各教科等と「社会創造科」の双方で発揮され、高まり続けていくことから、各教科等と「社会創造科」との関係を、「相互に高め合う関係」ととらえている。

この構造図をもとに、以下のような教育課程を編成し、評価・改善を図ってきた。

- 幼稚園**
- 教育課程の内容
 - ・ 「社会創造科」で設定した4つの資質・能力の「芽」をはぐくむ。
 - ・ 5歳児後半から「社会創造科」において、幼児と児童との「異年齢協働探究型学習」を、遊びを通して行う。
 - 評価について
 - ・ 遊びの中で見られた子どもの姿を集積し、「社会創造科」で設定した4つの資質・能力の「芽」の妥当性とはぐくまれ方を評価する。
 - ・ 幼稚園教師と小学校教師でリフレクションを行い、「異年齢協働探究型学習」における幼児と児童の学びを集積し、カリキュラムの妥当性、幼小接続期の在り方を評価する。
- 小学校**
- 教育課程の内容
 - ・ 「社会創造科」を新設し、持続可能な社会に関する認識・態度、持続可能な社会を創りあげる資質・能力、新たなものを創りだす技法・技能をはぐくむ。その際、第1・2学年では、生活科の全時数と教科等の一部の時数から充て、履修時数は第1学年132単位時間、第2学年135単位時間とする。第3学年から第6学年で

- は、総合的な学習の時間の全時数と教科等の一部の時数から充て、履修時数は105単位時間とする。
- ・ 「社会創造科」では、「異年齢協働探究型学習」を行い、地域の人とともに地域の問題を解決する活動を組織する。
 - ・ 小学5・6年生と中学1年生との「異年齢協働探究型学習」を行う。
- 評価について
- ・ 子ども・教師・保護者・地域の人に実施したアンケートや子どもの学びの姿から「社会創造科」を新設した教育的効果について評価する。
 - ・ 子ども・教師・保護者・地域の人に実施したアンケートや「異年齢協働探究型学習」における児童と幼児、児童と生徒との学びの姿から、カリキュラムの妥当性、幼少、小中接続期の在り方を評価する。

中学校

- 教育課程の内容
- ・ 「社会創造科」を新設し、持続可能な社会に関する認識・態度、持続可能な社会を創りあげる資質・能力、つなぎ創り出す技法・技能をはぐくむ。その際、各学年共に総合的な学習の全時数と教科等の一部の時数から充て、履修時数は第1・2学年85単位時間、第3学年70単位時間とする。
 - ・ 「社会創造科」では、「異年齢協働探究型学習」を行い、地域の人と一緒に地域の問題を解決する活動を組織する。
- 評価について
- ・ 子ども・教師・保護者・地域の人に実施したアンケートや子どもの学びの姿から「社会創造科」を新設した教育的効果について評価する。
 - ・ 子ども・教師・保護者・地域の人に実施したアンケートや「異年齢協働探究型学習」における生徒と児童の学びの姿から、カリキュラムの妥当性、小中接続期の在り方を評価する。

この教育課程のもと、以下の①～③の研究内容に取り組んできた。

① 一貫教育カリキュラムによる「協働型学習」の開発

一貫教育カリキュラムのもとで「協働型学習」を行うことを通して、協働型学習カリキュラムの開発に取り組んだ。

一貫教育カリキュラムとして、幼稚園では、遊びを通して学びの「芽」をはぐくむ「『芽』のはぐくみを目指した保育計画」を作成してきた。各教科等では、思考力・判断力・表現力を観点に「社会的な知性」のはぐくみに必要な資質・能力を設定し、その資質・能力を小中一貫して身に付けるために「資質・能力系統表」と「年間単元配列表」を作成してきた。

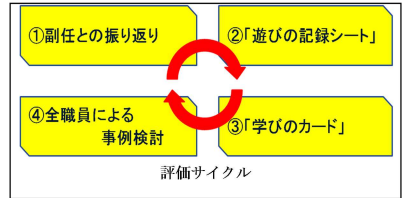
また、上記カリキュラムに設定した資質・能力と知識・技能等を確実に身に付け、それらを様々な問題解決場面で活用可能にするための手だてとして「協働型学習」を開発してきた。

ア 一貫教育カリキュラムについて

○ 「『芽』のはぐくみを目指した保育計画」の作成

幼児教育では、4つの資質・能力のはぐくみを促す心情を「芽」と位置付け、子どもの姿を集積することを通して「芽」の具体、及び、有効な環境構成や教師の援助の在り方を探ってきた。

その方法として、右の評価サイクルを開発し、4つの資質・能力の「芽」のはぐくみ、及び、環境構成や教師の援助の有効性を検証してきた。この評価サイクルによる子どもの姿の分析から、以下のような4つの資質・能力の「芽」である心のはたらきが見えてきた。



- 興味・関心 ○楽しさ、心地よさ ○イメージ ○達成感、満足感 ○かかわりの必要感

これらの心のはたらきは、主体的な遊びの中で、環境構成や教師の援助を通して「ひと・もの・こと」への愛情・愛着とともにほぐくまれていく。

この知見を基に、小学校へのつながりを踏まえた保育カリキュラムとして、遊び配列と4つの資質・能力の「芽」である心のはたらき、及び、それをはぐくむための環境構成や援助の在り方を示した「『芽』のはぐくみを目指した保育計画」を作成し、実践を通して完成させた。

○ 資質・能力系統表と年間単元配列表の作成

「社会創造科」を含む各教科等では、思考力・判断力・表現力の観点から、軸となる資質・能力を以下のように設定した。

各教科等	各教科等で設定した資質・能力	各教科等	各教科等で設定した資質・能力
幼児教育	「社会創造科」ではぐくむ4つの資質・能力の「芽」	体育	「動きを模倣する力」「動きを比較する力」「動きを分析する力」
国語	「論理的読解力」「論理的表現力」	技術・家庭	「生活と関係付ける力」「工夫・創造し、実践する力」
社会	「社会的事象を関係的にとらえる力」	外国語活動・英語	「表現の能力」「理解の能力」「対話構築力」
算数・数学	「とらえ直す力」「伝え表す力」	「道徳」	「自分とのかかわりで問題をとらえる力」「道徳的価値を見直していく力」
理科	「比較する力」「関係付ける力」「推論する力」「条件制御する力」「分析・解釈する力」	学級活動	「自分の願いを語る力」「仲間の願いを聴く力」

音楽	「感受する力」「表現を工夫する力」	健康教育	「心身の状態をとらえる力」「健康な生活へ高める力」
図画工作・美術	「造形的な思考力」「表現との対話力」	「社会創造科」	「自己推進力」「人間関係構築力」「問題解決力」「開発力」

「社会創造科」を含む各教科等では、発達段階を踏まえ、上記の資質・能力の系統的な高まりを示した「資質・能力系統表」を作成した（下表は算数・数学科の例）。第1年次研究では、その資質・能力を思考力・判断力・表現力の観点から見直し、現行の学習指導要領に沿う形にした。第2年次研究では、学力調査の結果や授業の取組の様子を踏まえ、資質・能力の段階を見直し、より子どもの実態に合うようにした。

また、各教科等で設定した系統的な資質・能力を位置付けた「年間単元配列表」を作成することでカリキュラム化を図ってきた。「社会創造科」を含む各教科等の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、思考力・判断力・表現力を効果的にはぐくむため、随時、学習内容、単元配列、時数等の見直しを行ってきた。

実践・評価を行いながら、ステージの高まりに伴う資質・能力の系統性や段階性を見直し、資質・能力系統表、年間単元配列表に修正を加えてきた。これにより、校種間の接続を意識したカリキュラムとして妥当性、一般性の高いものとなった。

イ 「協働型学習」について

「協働型学習」とは、問題解決過程のある段階に、子ども同士が意見や考えを交流させる「協働」場面を位置付け、互惠関係を築く（かかわり合うもの同士がプラスの影響を受け合う）ことを通して様々な問題解決場面で活用可能な資質・能力や知識・技能を確実に身に付ける学習である。本研究では、様々な場面で活用可能な資質・能力、知識・技能を「生きて働く力」と定義し、この「協働型学習」を通してはぐくむことにした。

「協働型学習」において、互惠関係を築き、「生きて働く力」をはぐくむために5つの要素から見た教師の手だてを設定した（右表）。このような手だてを講じることにより、互いの考えのズレを顕在化させ、ズレを解消させるような交流を生み出すことができる。この中で、子どもたちは互惠関係を築く。

このような手だてを設定しながら「協働型学習」の実践を積み重ねてきたことを通して、発達段階に適した5つの要素があることが見えてきた。そこで、5つの要素を、ステージ毎に整理し、発達段階に適した手だての一般化を試みた「協働型学習手だて一覧表」を作成した。

② 「社会創造科」の新設

「社会創造科」では、持続可能な社会を創りあげるために身に付ける力等の内実を明らかにするとともに、「異年齢協働探究型学習」を導入した。各ステージで単元開発を行い、実践を通してカリキュラム開発を行ってきた。

ア 「社会創造科」で身に付ける「学習内容」について

「社会創造科」において身に付けるべき力等を「学習内容」とし、次のように設定した。

○持続可能な社会に関する認識・態度	○4つの資質・能力	○つなぎ創り出す技法・技能
-------------------	-----------	---------------

第1ステージでは、主体的な遊びを通して、4つの資質・能力（「自己推進力」「人間関係構築力」「問題解決力」「開発力」）につながる心情を「芽」と位置付け、はぐくんできた。

第2、第3ステージでは、主に「自己推進力」「人間関係構築力」を高め、身の回りの「ひと・もの・こと」への愛情・愛着をはぐくみ、第4、第5ステージでは、主に「問題解決力」「開発

とらえ直す力	・内容や方法の共通点を見つけ関連づけ、構造化する。 ・筋道立てながら問題解決の見直しをもつ。 ・数学的表現同士を関連づける。			
伝え表す力	・数学的表現（言語・数式・絵図・図表・グラフ・操作など）を自分なりに用いて、自分の考えを説明する。 ・自分の考えを筋道立てて説明する。			
	第2ステージ 小学校1・2年	第3ステージ 小学校3・4年	第4ステージ 小学校5・6年・中学校1年	第5ステージ 中学校2・3年
とらえ直す力	・共通点を見出すことができる。 ・問題解決に必要な既習事項や既存の経験を見出し、生かすことができる。	・共通点を見出し、関連づけることができる。 ・問題解決に必要な既習事項を見出し、適切に生かすことができる。	・共通点を見出し、関連づけ、整理することができる。 ・問題解決に必要な既習事項を見出し、効率よくできる方法を選択しながら適切に生かすことができる。	・共通点を見出し、関連づけ、構造化することができる。 ・問題解決に必要な既習事項を見出し、効率よくできる方法を選択しながら適切かつ発展的に生かすことができる。
伝え表す力	・自分の考えをもち、主に操作・絵図・言語・式を用いて説明することができる。	・主に絵図・言語・式を用い、自分の考えと似ている仲間の考えを生かしながら、自分の考えを説明することができる。	・主に図・言語・式を用い、自分の考えと似ている仲間の考えや違う考えを効果的に使いながら、自分の考えを自分なりに表現を工夫して説明することができる。	・主に図や式を用い、自分の考えと似ている仲間の考えや違う考えを効果的に使い、関連する定義や性質を引用しながら、自分の考えを筋道立てて説明（証明）することができる。

要素1	場面・目的意識
要素2	交流相手
要素3	交流させるもの
要素4	交流方法・形態
要素5	記録方法

力」を高め、地域の問題を解決しながら持続可能な社会の在り様をとらえ、それを実現しようとする態度をはぐくんできた。

また、児童・生徒の発達段階に応じて、自分と人、考えと考えをつながげながら4つの資質・能力を高める「つなぎ創りだす技法・技能」(図、コンセプトマップ、マトリクス、KJ法、刈ッパ・デリッパ、三角ロジック等)を系統的に身に付けさせてきた。以下に、4つの資質・能力と下位の11の資質・能力を示す。

資質・能力		下位の資質・能力	
「自己推進力」	自分に自信をもち、自分を高めようとする力 「ひと・もの・こと」への愛情・愛着をもち、様々な困難に粘り強く立ち向かう力	自己認識力	あるがままの自己の姿を見つめ、前向きに受け止めて、自己改善していく力
		責任遂行力	引き受けたこと、しなければならぬことを確実に遂行する力
		価値認識力	「ひと・もの・こと」の価値をとらえ、愛情・愛着を強くし、それを守っていかうとする力
「人間関係構築力」	他者と円滑に交流し、良好な関係をつくる力	対話力	言語の果たず役割を理解し、様々な相手と様々な場面でコミュニケーションを図る力
		調和力	互いの立場や考えの違いを尊重し、バランスの良い方策や考えを構築する力
		共生力	他者とともに、新しい生活・社会を築く力
「問題解決力」	事象をとらえ、そこに潜む問題を分析し、解決方法を見いだす力	問題把握力	様々な方法を用いて問題を多面的にとらえ、その背景や原因を明らかにし、課題を設定する力
		論理的思考力	問題事象に対して、解決のための方法について道筋を立てて考える力
「開発力」	持続可能な社会の在り方をイメージし、それを実現するために自ら行動する力	企画力	社会のあるべき姿や価値を見だし、それを実現するための計画をつくる力
		実践力	問題解決上の困難を整理・克服しながら、願いや考えを具体的な形にする力
		発信力	自分(たち)の思いや願いを、様々な表現方法で効果的に表す力

イ 題材配列、単元配列について

第1～第3ステージにおいて、体験的に「ひと・もの・こと」への愛情・愛着を深めるような題材を取り上げ、実社会の問題解決への動機、意欲をはぐくむことにつなげてきた。第4ステージでは、第3ステージまでの学習を基に、長岡に関する追求の大テーマを4つ、小テーマを8つ設定し、現在地域が直面している問題について考えていく単元を配置する。第5ステージでは、第4ステージの学習を生かし、子どもたちが住む長岡が直面している問題について地域のひととともに考え、ともに解決していく活動ができるような単元を配置する。

ウ 「異年齢協働探究型学習」について

「社会創造科」では「異年齢協働探究型学習」を導入している。持続可能な社会を創りあげるために必要な「学習内容」を身に付けるためには、実社会の問題解決場面と同様に、様々な年齢や立場の人と手を携えて問題解決に取り組むこと、多様な問題を探究しながら解決することが必要であると考えたためである。この「異年齢協働探究型学習」を第2ステージから第5ステージまで行い、考えや立場が異なる異学年の仲間や地域のひとと互恵関係を築くことをねらっている。ステージが上がるにしたがって、身近なひととの活動から、地域の問題をともに解決しようとする様々な立場のひととの活動へと発展させる。

また、探究的な学習を可能にするために、学習プロセスとして、「①知る②調べる・まとめる③考える④行動する⑤評価する」の5段階にわたる問題解決過程を設定した。それぞれのプロセスには、用いる技法・技能、働かせる資質・能力、高める認識・態度を明示し、系統的に学習を進めていけるようにした。なお、このプロセスは不可逆ではなく、往復を繰り返しながら進む。

③ 「知」の循環型教育システムの構築

上記①と②により、各個人が学習を通して獲得した様々な経験や知識等の「知」を循環させ、それが更なる創造を生み出す「知」の循環型教育システムを構築することを目指してきた。

「社会的な知性」(持続可能な社会を創りあげる資質・能力)をはぐくむためには、自分とは異なった考えや立場の人と積極的に手を携えて互いにもつ*「知」を生かしながら問題を「協働」して解決したり、これまで獲得した「知」を社会に還元しながら新たなものを創造したりすることが必要である。*「知」を「これまで蓄積してきた様々な経験・知識等(生きて働く力を含む)」とする。

この下線部を、本研究では、「知」の循環ととらえている。そして、「『知』を循環させる」とは、「個人が獲得してきた『知』を生かしながら、他者と共に『協働』して問題解決をする」とことと「学校や地域で獲得した『知』を地域、社会に還元する」とことと考えた。

さらに、この「知」の循環は「社会創造科」によって学校と地域の間に起こり、副次的に地域の教育力を高めることができると考えている。

この学校教育から「知」を循環させ、更なる創造を生み出す仕組みを、本研究では「知」の循環型教育システムと呼び、開発に取り組んだ。

ア 子ども自身の中で起こる「知」の循環（個人が獲得してきた「知」を様々な問題解決場面で生かすこと）

前述のとおり、「社会的な知性」を構成する各教科等で身に付ける資質・能力と「社会創造科」で身に付ける4つの資質・能力とは重なる部分がある。子どもたちは、この各教科等と「社会創造科」とで重なる資質・能力を「協働型学習」を通して「生きて働く力」へと高め、双方の次の学習場面で発揮させ、さらに高める（4(1)で示した構造図の中央にある螺旋矢印がイメージ）。

この各教科等と「社会創造科」とで重なる資質・能力を「生きて働く力」として発揮させ、高め続けることを、子ども自身の中で起こる「知」の循環ととらえた。

また、「社会創造科」と各教科等の双方の学習で「生きて働く力」を発揮させる手だてとして、「社会創造科」で4つの資質・能力の働きを促すために用いている技法・技能（図、コンセプトマップ、マトリクス、KJ法、メリット・デメリット、三角ロジック等）を各教科等でも用いることにした。

イ 子ども同士の間で起こる「知」の循環（仲間と共に「協働」して問題を解決し、他者へ「知」を還元すること）

「協働型学習」によって、子ども同士の間で「知」を循環させる。「協働型学習」において、子どもたちは、習得してきた知識・技能や見方・考え方を活用しながら考えを交流し、互恵関係（かわり合うもの同士が相互にプラスの影響を受け合う）を築く。この互恵関係が築かれることを子ども同士の間で起こる「知」の循環であるととらえた。

ウ 学校と地域の間で起こる「知」の循環（地域の人と共に「協働」して問題を解決し、地域、他者へ「知」を還元すること）

地域の人と行う「異年齢協働探究型学習」によって、学校と地域の間で「知」を循環させる。子どもたちは、地域の問題を自分事としてとらえ、地域の人と子どもたちが互恵関係を築きながら実践的に問題を解決する。この地域の人との互恵関係を学校と地域の間で起こる「知」の循環であるととらえた。

(2) 研究の経過

第3年次	<ul style="list-style-type: none">◎ 「社会的な知性」をはぐくむための幼・小・中12年間を見通した協働型学習カリキュラムの提言① 「協働型学習」「幼小中合同活動」による幼・小・中12年間を見通した教育課程の実践と評価② 「協働型学習」「社会創造科」「教科等と社会創造科の関係」に関する一貫教育カリキュラムの作成③ 「社会的な知性」の育成を目指した一貫教育フォーラムの開催④ 様々な場面で活用可能な状態にある「生きて働く力」の事例の集積⑤ 「社会創造科」の学習指導要領の完成⑥ 公開研究会の開催⑦ 先進校の視察
------	--

(3) 評価に関する取組

第3年次	<ul style="list-style-type: none">◎ 「社会的な知性」を培うための幼小中一貫による「協働型学習」「幼小中合同活動」の検証・評価と改善のために、幼・小・中それぞれに開発した教育課程やその実践について、運営指導委員会や大学の教科教育担当の学部教員から指導・助言の下に評価を行う。<ul style="list-style-type: none">○ 研究運営組織の評価<ul style="list-style-type: none">・ 幼・小・中の職員による評価を行い、組織・運営について成果・問題点を整理する。○ 単元評価<ul style="list-style-type: none">・ 教科等における思考力・判断力・表現力の高まりを2年次に開発した評価方法を用いて評価する。○ 教育課程の評価<ul style="list-style-type: none">・ 幼・小・中の連続した「個人記録シート」の実際から、校園職員による子どもを語る会を定期的に行い、個の成長、「社会的な知性」の伸長、「個人記録シート」の在り方についての評価を行う。・ 公開研究会及び運営指導委員会・教科教育担当の学部教員・保護者などによる幼・小・中それぞれの教育課程や学習活動、及び地域の専門家・市民、施設との連携交流活動、学校運営体制全体についての評価を行う。・ 「社会的な知性」に関する調査を実施して、その調査結果と実態把握アンケートとの相関を分析し、教育課程や学習活動の改善に反映させる。・ 開発単元、教科等の重点単元を整理し、「社会創造科」のカリキュラムを見直す。・ 小学校・中学校でCRT、NRT、全国学力調査を実施し、これまでのデータから、学習指導要領に示された内容定着への効果を分析する。・ 小学校・中学校でQ-Uを実施し、これまでのデータから、人間関係の実態を調査するとともに、「社会的な知性」をはぐくむために新設した「社会創造科」の効果を分析する。
------	--

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 幼児・児童・生徒への効果

ア 実態把握アンケートの結果から（「社会創造科」，「協働型学習」に関する効果）

「社会的な知性」のはぐくみを検証するため、幼稚園年中児・年長児と小・中学校全児童・生徒に4つの資質・能力に関する「実態把握アンケート」を実施した。以下の経年データは、小中接続期にあたる第4ステージに所属する現在中学1年生のものである（平成22年度～平成24年度）。

ここでは、中一ギャップの一因である自己肯定感の低下について検証するために「自己推進力」のデータと、「協働型学習」や「社会創造科」の効果を検証するために「人間関係構築力」「問題解決力」のデータの一部を示す。また、各資質・能力の左欄は、その力の大切さを自覚しているかどうか（**自覚**）を問う設問に対する肯定的評価（4段階評価の4と3）の割合、右欄は、その力を生活の中で発揮しているかどうか（**能力**）を問う設問に対する肯定的評価の割合を示した。

「自己推進力」自己認識力（左 自覚 ，右 能力 ） ※当校園の数値には、公立小学校出身者は含まれてない																									
質問 自分にはいいところがある	質問 自分のいいところを日常生活で生かしている																								
<table border="1"> <caption>「自己推進力」自己認識力（自覚）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>89.3</td> <td>86.5</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>76.4</td> <td>88.6</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>89.0</td> <td>73.6</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	89.3	86.5	H23.11 (小6)	76.4	88.6	H24.11 (中1)	89.0	73.6	<table border="1"> <caption>「自己推進力」自己認識力（能力）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>84.2</td> <td>89.1</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>75.4</td> <td>77.2</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>83.6</td> <td>77.8</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	84.2	89.1	H23.11 (小6)	75.4	77.2	H24.11 (中1)	83.6	77.8
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	89.3	86.5																							
H23.11 (小6)	76.4	88.6																							
H24.11 (中1)	89.0	73.6																							
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	84.2	89.1																							
H23.11 (小6)	75.4	77.2																							
H24.11 (中1)	83.6	77.8																							
「人間関係構築力」調和力 ※当校園の数値には、公立小学校出身者は含まれてない																									
質問 相手の話をしっかり聞いたり，意見をつなげるように話をしたりすることは大切だ。	質問 相手の話をしっかり聞いたり，意見をつなげるように話をしたりしている。																								
<table border="1"> <caption>「人間関係構築力」調和力（自覚）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>100.0</td> <td>98.6</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>95.9</td> <td>97.1</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>100.0</td> <td>93.1</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	100.0	98.6	H23.11 (小6)	95.9	97.1	H24.11 (中1)	100.0	93.1	<table border="1"> <caption>「人間関係構築力」調和力（能力）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>80.3</td> <td>91.7</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>81.9</td> <td>84.3</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>91.8</td> <td>83.3</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	80.3	91.7	H23.11 (小6)	81.9	84.3	H24.11 (中1)	91.8	83.3
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	100.0	98.6																							
H23.11 (小6)	95.9	97.1																							
H24.11 (中1)	100.0	93.1																							
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	80.3	91.7																							
H23.11 (小6)	81.9	84.3																							
H24.11 (中1)	91.8	83.3																							
「問題解決力」問題把握力 ※当校園の数値には、公立小学校出身者は含まれてない																									
質問 新聞や本，ニュースを見て，「どうしてこんなことが起きるのだろう」と考えることは大切だ。	質問 新聞や本，ニュースを見て，「どうしてこんなことが起きるのだろう」と考えている。																								
<table border="1"> <caption>「問題解決力」問題把握力（自覚）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>96.0</td> <td>97.3</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>89.1</td> <td>97.2</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>98.6</td> <td>83.4</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	96.0	97.3	H23.11 (小6)	89.1	97.2	H24.11 (中1)	98.6	83.4	<table border="1"> <caption>「問題解決力」問題把握力（能力）</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>当校園</th> <th>A中学校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22.11 (小5)</td> <td>82.9</td> <td>89.0</td> </tr> <tr> <td>H23.11 (小6)</td> <td>65.0</td> <td>74.3</td> </tr> <tr> <td>H24.11 (中1)</td> <td>82.2</td> <td>69.5</td> </tr> </tbody> </table>	年度	当校園	A中学校	H22.11 (小5)	82.9	89.0	H23.11 (小6)	65.0	74.3	H24.11 (中1)	82.2	69.5
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	96.0	97.3																							
H23.11 (小6)	89.1	97.2																							
H24.11 (中1)	98.6	83.4																							
年度	当校園	A中学校																							
H22.11 (小5)	82.9	89.0																							
H23.11 (小6)	65.0	74.3																							
H24.11 (中1)	82.2	69.5																							

全体的に小学6年生で数値が一度下がり，中学1年生で数値を上げている傾向がある。これは，すべての資質・能力に関しても同様の傾向である。発達段階や12月に控えている中学校入学検査への不安が小学6年生の数値の低下に影響している可能性がある。

同地域にあるA中学校の中学1年生と比較すると，A中学校は小学6年生から中学1年生へと数値を下げているが，当校園は数値を上げている。第4ステージの「社会創造科」において，中学1年生が小学5・6年生をリードしながら定期的，継続的に学習をしていることや「協働型学

習」によって他者の考えを受け入れ自分の考えを高めながら問題解決に取り組んでいることの効果だと考えられる。

中一ギャップの解消という視点から見て、ステージ設定、「社会創造科」「協働型学習」の取組には効果があったと考えられる。

イ 全国学力状況調査B問題の結果から（一貫教育カリキュラム、「協働型学習」に関する効果）

思考力・判断力・表現力を視点に設定した資質・能力を軸に開発してきたカリキュラムの効果（思考力・判断力・表現力のはぐくみ）を、平成24年度4月に行った全国学力状況調査B問題（活用）の正答率から検証する。下の表には、平成22年度中学3年生と全国国立学校の平均正答率の差と平成24年度中学3年生と全国国立学校の平均正答率の差を示す。

	国語B		数学B	
	H22 中学3年生	H24 中学3年生	H22 中学3年生	H24 中学3年生
当校園正答率	83.5%	81.7%	67.8%	75.8%
全国国立学校正答率	83.5%	78.7%	73.9%	76.8%
全国との差	-0.8	+3.0	-6.1	-1.0

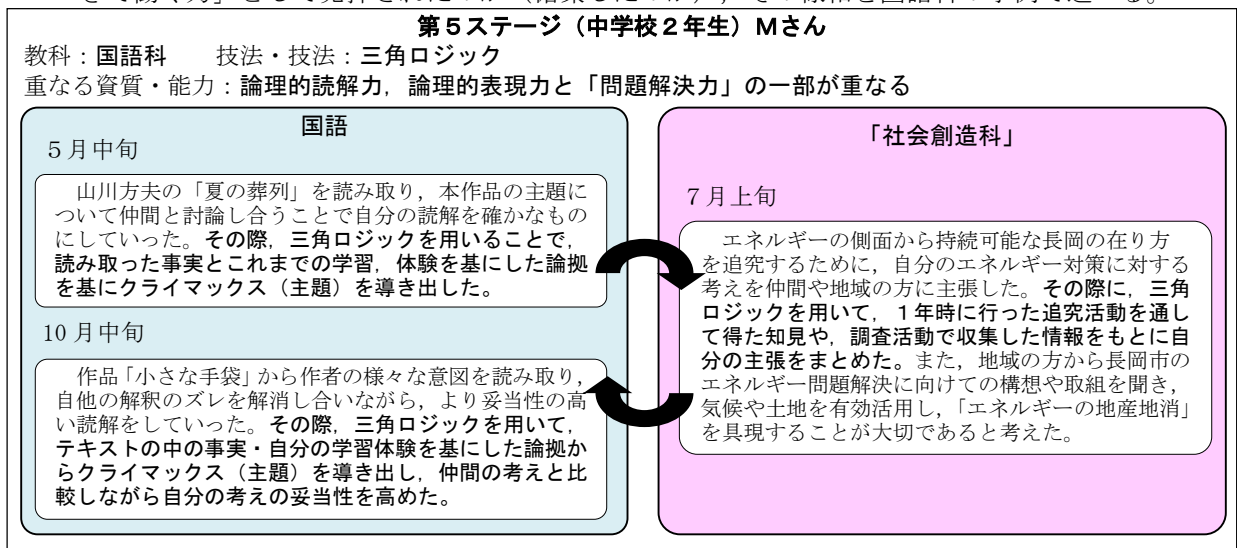
本研究に取り組む前の中学3年生と本研究に2年間取り組んできた中学3年生を比べると、全国国立学校の平均正答率との差を大きく縮め、国語Bでは3ポイント上回った。この結果から、当校園の開発した一貫教育カリキュラムのもとで「協働型学習」に取り組んできたことが思考力・判断力・表現力のはぐくみに一定の効果があると判断できるが、これらの効果を数値による妥当性の高い検証をするためには、更なる期間が必要である。

ウ 各教科等と「社会創造科」の学びの姿から（「知」の循環型教育システムに関する効果）

ここでは、子ども自身の中で起こる「知」の循環と学校と地域の間で起こる「知」の循環について述べる。

○ 子ども自身の中で起こる「知」の循環の様相

各教科等と「社会創造科」とで共通する技法・技能を取り入れた「協働型学習」を通して高めた「重なりのある資質・能力」が、後の「社会創造科」や各教科等の実践においてどのように「生きて働く力」として発揮されたのか（循環したのか）、その様相を国語科の事例で述べる。



このように、三角ロジックを用いて論理的に思考する姿が確認できた。共通点のある技法・技能を用いることで、各教科等と「社会創造科」とで重なりのある資質・能力を子ども自身の中で循環させて、高めている様子を見取ることができた。教科等と「社会創造科」の資質・能力の重なる部分を、技法・技能を取り入れた「協働型学習」を行うことに効果があったと考えられる。

○ 学校と地域等の中で起こる「知」の循環の様相

子どもたちは、地域で地域の人と活動することで認識や資質・能力等を高めるといふ恩恵を受ける。地域からは、子どもたちから新たな発想を得たり、長期的に考えると自分の後継者を育てたりするような恩恵を受ける。子どもたちから恩恵を受けた地域の人々が別の人と新たなつながりをもつことで、さらに別の地域の人との「協働」が始まり、互惠関係を築く。以下はその一例である。

ステージ	子どもの願い（認識）と地域の方へのプラスの影響	地域の人	新たなつながりをもった協働相手
5	震災復興に励む東北地方の人に向けたメッセージを貼り付けた花火を、震災復興を願って始まった長岡花火大会で打ち上げる。このことをきっかけに、長岡花火大会の美しさだけでなく、そこに込められた思いを全国の人に知ってもらいたいと考えようになった。（地域のブランド化） ここでは、「生徒の願い」「花火を利用するという発想」が地域の人々に与えたプラスの影響である。	地域ボランティアの人	東京の会社 （（株）POKÉMON with YOU） （（株）小学館集英社プロダクション） 秋田のキャラクター花火専門業者 （北日本花火興業）
	長岡野菜の存在を多くの人に知ってもらうために、長岡野菜を題材にしたカルタを創作している。このことをきっかけに、子どもから大人までカルタ遊びや長岡野菜の料理を楽しむことができる交流の場をつくりたいと考えている。（長岡野菜のブランド化とコミュニティの形成） ここでは、「カルタを通して親にも子にも長岡野菜を知ってもらう」という発想が地域の人々に与えたプラスの影響である。	NPOに参加している人	同じ地域の印刷会社 （中越印刷） 同じ地域の大学 （長岡大学）

第5ステージでは、地域の人との「異年齢協働探究型学習」を通して、子どもと互恵関係を築いた地域の人々が、同じ地域の別の人、他の地域や県の人と新たなつながりを持ち、子どもたちとともに活動を進めていく様子が見られるようになってきた。学校と地域の間で「知」を循環させる手だてとして「異年齢協働探究型学習」に効果があることが見えてきている。

② 教師への効果

ア 「社会創造科」アンケート（職員）の結果から

「社会創造科」の新設にあたり、「社会創造科」を担当した職員（24名）に以下の設問でアンケートを実施し、評価4～1の人数の割合を示す。なお、下段には、平成22、23年度の数値を示した。

教員アンケート（平成24年10月29日～11月9日に実施）（4とでもある 3ある 2あまりない 1ない）					
	4	3	2	1	平均
項目1 児童生徒への理解 社会創造科に取り組んだことで、自学級・自学年・同ステージ内の児童生徒の理解に効果がありましたか。	33.4% H23 (35%) H22 (50%)	66.6% H23 (65%) H22 (30%)	0.0% H23 (0%) H22 (20%)	0.0% H23 (0%) H22 (0%)	3.3 H23 (3.3) H22 (3.3)
項目2 教科・科目等への理解 社会創造科を開発するにあたって、「持続可能な社会を創りあげる資質・能力」をはぐくむための教科のあり方、について認識の深まりはありましたか。	29.2% H23 (29%) H22 (10%)	66.6% H23 (54%) H22 (70%)	4.2% H23 (17%) H22 (20%)	0.0% H23 (0%) H22 (0%)	3.2 H23 (3.1) H22 (2.9)
項目3 指導方法等の改善 社会創造科に取り組んだことは、「協働型学習」をはじめとする自身の指導法の改善に役立ちましたか。	41.6% H23 (17%) H22 (10%)	50% H23 (46%) H22 (50%)	8.3% H23 (37%) H22 (40%)	0.0% H23 (0%) H22 (0%)	3.3 H23 (2.8) H22 (2.7)
項目4 教員の教育実践への意欲・自信・満足感 社会創造科の実践を通して、自分自身に喜びがありましたか。	50.0% H23 (42%) H22 (30%)	45.8% H23 (46%) H22 (40%)	4.2% H23 (12%) H22 (30%)	0.0% H23 (0%) H22 (0%)	3.5 H23 (3.2) H22 (3.0)
項目5 教員間の連携・協力 社会創造科に取り組んだことで、学年間・ステージ内・校種間の教職員の連携や協力がありましたか。	33.3% H23 (29%) H22 (30%)	58.3% H23 (61%) H22 (30%)	8.3% H23 (7%) H22 (40%)	0.0% H23 (3%) H22 (0%)	3.3 H23 (3.0) H22 (2.9)

どの項目でも4と3の肯定的評価の数値は上昇している。特に、項目3の4評価は前年比で約24ポイント上昇した。項目3については、以下のような記述が多く見られた。

- ・技法・技能について、教科のどんなときに使うと効果的かを考えることができた。
- ・技法・技能についての面でプラスがあった。（使う目的や使い方への理解を深める）
- ・仲間と協力したり、話し合ったりすることが大切であり、それを進めるために「協働型学習」が役立っていった。そのことを、教科の学習にも生かすことができた。

「社会創造科」の「学習内容」であるつなぎ創りだす技法、技能についての記述が多く見られた。「協働型学習」に各教科等と「社会創造科」で共通の技法・技能を取り入れ、「生きて働く力」を双方の学習場面で発揮させようと取り組んだことが自分の教科等の指導改善につながった。

③ 保護者等への効果

ア 「社会創造科」に関する保護者のアンケートから

「社会創造科」に関する保護者への効果を探るため、7月末と11月に、幼稚園年長から中学3年までの保護者を対象とし、以下の設問でアンケートを行った。（7月末は中学校、11月は幼稚園、小学校）

設問1：社会創造科に取り組むことをお子さんは楽しんでいましたか（幼）社会創造科の授業は楽しいですか（小）
社会創造科の授業は魅力的で、楽しみである（中）

設問2：社会創造科に取り組んだことで、小学1年生と仲良くなりましたか（幼）
 設問2：社会創造科を学習して地域（地域の人、場所、ものなど）を好きになりましたか（小）
 設問2：社会創造科を学習して地域（長岡）に興味や関心をもつようになりましたか（中）
 設問3：ご家庭で社会創造科の学習を話題にお子さんと話をすることがある（幼小中共通）

「3 まあまあ当てはまる」「4 とても当てはまる」を肯定的な評価の割合を次頁に示し、考察を述べる。なお、下段の数値は昨年度11月下旬～12月初旬にかけて実施した時の数値である。

	幼稚園	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
設問1	94%	82%↑ (50%)	96%↑ (89%)	96%↑ (91%)	84%↓ (93%)	82%↓ (88%)	80%↓ (91%)			
設問2	89%	68%↑ (52%)	85%↑ (60%)	89%↑ (87%)	80%↑ (73%)	73%↓ (76%)	62%↓ (76%)	86%↑ (69%)	91%↑ (80%)	83%↑ (75%)
設問3	77%	72%↑ (54%)	87%↑ (70%)	72%→ (72%)	67%↓ (80%)	84%↑ (67%)	79%↑ (67%)	71%↑ (69%)	82%↑ (76%)	81%→ (81%)

今年度は、全てのステージで授業公開、便り等で活動を紹介したり、第5ステージで「校外活動報告書」を保護者に提出したりするなど、積極的に保護者への発信を行った。このような手だてと「社会創造科」の3年間の取組から、設問3に対する数値が多くの上昇した。「社会創造科」の活動の様子が家庭に伝わることで、保護者の関心や評価が高まってきていると考えられる。

イ 「社会創造科」に関する地域の人へのアンケートから

「社会創造科」の学習に継続的に関わっていただいた地域の人（回答者21人）を対象に、11月中旬頃アンケートを実施した。「社会創造科」への期待、子どもたちと活動することの価値について4段階で評価していただいた。以下は、各評価の人数と割合である。

設問	評価	4（とてもあてはまる）	3（あてはまる）	2（あまりあてはまらない）	1（あてはまらない）
よりよい地域社会のために社会創造科の学習は期待できる		11人（52%）	10人（48%）	0人	0人
児童や生徒とともに活動することに価値を見いだすことができた		9人（45%）	10人（50%）	1人（5%）	0人（無回答1人）

商品の開発・販売やイベントの企画・開催等、新聞や雑誌に紹介されるような成果をあげるグループも多くなってきた。地域の人にも「社会創造科」の学習に価値と期待を感じていることが分かる。地域の人から子どもたちからどんなプラスの影響を受けたのかを答えていただいた。その一部を紹介する。

- ・中学生向けの体操着を共同開発した。中学生は、わたしたち業者とは違う観点で物事を判断する。生徒から提案されたことは、商品開発するだけでなく営業時の広報活動に十分生かされた。（体操着製造販売業者の方）
- ・中学生と活動することで、企業色（商売目的）を出さずに地域を盛り上げるイベントに参加できた。地域の中での会社の在り方を考えるきっかけとなった。こんな学校が地域にあることを誇りに思います。（印刷会社の方）
- ・子育て中の親子が中学生と触れ合う多世代交流ができた。当施設で無理だと思っていたことが可能だった。スタッフの視点を変えることができた。チラシを見て来た親子もいて宣伝効果もあった。（子育て支援施設の方）

上記から、地域の人から子どもたちと互恵関係を築いている様子をうかがい知ることができ、「異年齢協働探究型学習」の効果が表れている。

（2）研究実施上の問題点と今後の課題

① 問題点

組織や部会の持ち方等を毎年改善してきているが、幼・小・中職員間の打ち合わせ時間の確保、調整については絶えず苦慮している。今後も、職員へのアンケートを実施し、研修運営組織の見直しと再編、研修内容の吟味、各校園の行事等の調整を図っていく。

「社会創造科」の学習を進めるにあたり、人材バンクを作成し、活用を試みてきたが、地域の人との連携が円滑に取れるシステム作りをさらに進める必要がある。

② 今後の課題

ア 研究推進上の課題

- ・「社会創造科」を中心とした、日常の取組のための異校種間の打ち合わせ時間の捻出
- ・大学・学部との連携体制の整備と年間予定の明確化

イ 研究内容面での課題

- ・身に付けた知識・技能や資質・能力を生かすことができるカリキュラムへの改編（小中指導事項の移行）
- ・「社会創造科」の学習を中心に地域全体が積極的に学校教育に参画できる環境づくり
- ・「生きて働く力」をはぐくむ学習過程の明確化